

パイデイア（そのXIV）

——クセノポン…地主・兵士…の理想——

G・ハイエット
村島義彦 訳

この上ない天才ともいべきプラトンの作品は、学園アカデメイアの手でしっかりと保持され散逸を免れたが、この他にも、ソクラテスを取り巻くサークルの一員でかなりの量の作品が今に残されている作家がただ一人いた。ほかでもない、門外漢ともいべきクセノポンがそれで、これは「単なる偶然」ともいいがたい。それ以外のソクラテスの門下生は、アンティステネスにしる、アイスキネスにしる、アリスチッポス等々にしる、ひたすら師の道徳的教説を模倣したのみで、ほとんど名前しか残されていない。これに対してクセノポンは、いつの時代にも読書界の「人気者」であった。当人の関心が実に多面的で、その文体が多彩であったのに加えて、人柄の方も、あまたの制約を抱えながら、活力に溢れて好感を抱かせたからであろうか。そのようなクセノポンを、後期古代の古典学者たちは「アッティカの優美と魅力を代表する至上の存在」とみなしたが、これは、しっかりと的を射ていた。かれの文体は平明で分かり易く、子供たちも、つねに学校で読書に用いたので、そうした当人を、ただ単に「広く読まれてよいギリシア最初の散文作家」とのみ捉えないで、作品に目を通す際にも、トキュデイデス、プラトン、デモステネスなどの同世紀の偉大な作家たちに次いでそうしたなら、クセノポンはきつと、みずからの時代を最も純粹に具現しているな…と実感さ

れるにちがいない。しこうして、文体の愉快さにもかわらず知的・内容面で「凡庸な」とも思われる著作自体の多くの局面が、もつと別の光にかざして眺められるのではないだろうか。

故国で博した人気にもかかわらず、クセノポンは、単なる「時代の平均人」——つまりは「並の人」——でなく文字通りの「個人」であった。かれの肩には奇妙な運命が背負われ、これは、当人の本性や置かれた環境から論理的に導き出された。生まれたのはイソクラテスと同じアッティカの区で、かれ自身も、成人期を迎えようとしていたペロポネソス戦争の最後の一〇年間に、イソクラテスやプラトンが嘗めたのと同じ身の不幸を体験した。同世代の若者たちと同じく、クセノポンも、ソクラテスに魅了されて「虜」となった。かれは、厳密には「ソクラテスの弟子」と言えなかつたが、この老師の感化はあまりに深く消えなかつたのか、ペルシア遠征から帰還後の人生で、師を記念する永遠の作品を一つならずまとめ上げた。もつとも、かれの運命を實際に形造つたのは、そうしたソクラテスでなく、冒険と戦いを求めて燃え盛る自身の情熱にほかならない。この情熱は当の本人を導いて、空想癖の強い反逆者のキュロス王子の許に赴かせ、その旗の下で傭兵団の一員として戦わせたからである。そのような企てを記述して、かれは、わけても精彩に富んだ作

品(『アナバシス』ないし『キュロスの遠征』)を詳しくまとめたが、これによって、スパルタの政治的影響に染まっているのでは・・・との嫌疑が降りかかり、追放に処されて、アジア遠征で手にした貴重な軍事的・民族的・地理学的体験を無にしないわけにはいかなかった。『アナバシス』にはこう語られている。わたしは、ペロポネソス半島の北西に位置するエリスという農業地帯のスキルスに、スパルタの人びとから地所を与えられた、と。スキルスは『第二の故郷』となって、当人は、平和の裡に多年を過ごし、あくまでも趣味で農事に勤しむ大地主として数々の著作をまとめ上げた。かれは、農夫としての多彩な生活を深く愛したが、

それに加えてソクラテスへの止みがたい追慕も、さらには歴史と軍事への広い関心も、その本性の強い特徴であった。前者は、後者に劣らず作品の重点要素であるだろう。故国アテナイの民主体制と政治的にこじれて、クセノポンは、スパルタに移らざるを得なくなった。その当時、ギリシアにおける指導者の地位をほとんど揺るぎなく固めていたこの国で、指導層の面々や国自体の内部構造をいっそう深く知るに及んで、それに促されたのだろうか、ほどなく『ラケダイモン人の国制』とアゲシラオスへの賛辞がまとめ上げられた。これに対して、通常は『ヘレニカ』の名で知られている当人の『ギリシア史』は、自身の関心の広さを際立たせて、当時の歴史の全体をしっかりとカバーし、『キュロバイディア』こと「キュロスの教育」は、ペルシアで受けた印象の数々を克明に映し出していた。アテナイが第二次海軍同盟を介して往年の権力のいくばくかを回復した時期、クセノポンの身は、いまだ故国からはるか遠くにあつて、帰国の方は、アテナイの最後の大々的な政治的偉業ともいふべき『同盟』の崩壊まで果たされなかった。ようやくに帰国を果たし、かれは、小ぶりの実践的作品をいくつかまとめてアテナイの軍事と経済の立て直しに力を貸そうと試みた。アテナイとその同盟国間の戦争(前三五五年)

も終わってほどなく、クセノポンの姿は目にされなくなった。かれは、この時まで七〇の大台を超え、以後はそれほど長く生きなかつたにちがいない。かれの生年と没年は、それゆえプラトンのそれとかなり重なり合っている。

クセノポンは、多彩な経歴も示すように、みずからのポリスが課す『狭い制約』の範囲内ではとうてい暮らしていけそうもないな・・・と心ひそかに悟って、ポリスからの『自己疎外』を痛いほどに噛み締めた人間の一人であった。そうした中で、双方の間に架橋しがたい『深い溝』を現実に作り出したのは、かれ自身もほとんど予想できなかった『亡命』にほかならない。当人がアテナイを後にしたとき、あの大戦争はアテナイの惨めな敗北に終わり、内での混乱と外での帝国の崩壊は、救いようのない猜疑の渦に若い世代を投げ込んだ。かれは、何とかして自身の人生を築き上げねば・・・と心に決めた。そしてソクラテスの弁明書をまとめたが、これは今や、もつと後の『メモラビリア』(ないし『ソクラテスの思い出』)の最初の二章にしつかりと登場し、この作品は、おそらくは前三九三年と前三九〇の間に——つまりは、ソクラテス当人とそのサークルに向けたソフィストのポリュクラテスの攻撃に『出版』という形で始められた文章の論駁の中で——まとめられたにちがいない。クセノポンは、ソクラテスの弁明人にわが名を連ねたが、これは、もっぱら政治的な理由によつた。かれは、ソクラテス当人がアルキビアデスやクリティアスと基本的発想を同じくしていた、という世の見解に追放先から強く反論した。新しいソクラテス派を非難する論敵たちが、ソクラテスに関わるすべてに『反民主的』の烙印を押すべく、両人こそ『ソクラテスの弟子』にほかならない、という証明に躍起となつていたのである。これ自体は、いくら下心に溢れた告訴人たちでも、死刑を賭けたソクラテス裁判であえて試みはしなかつたし、おまけにクセノポンも、アテナイ

への帰還を本気で意図していたのなら、そのようなグループの一員に色分けされるのは、この上なく危険であったにちがいない。この作品自体は、ソクラテスを押捺したポリュクラテスの政治風刺に抗してまとめられた『独立作品』という風に読まれてよいだろうが、ここからは、ざつと次のように推測されるかもしれない。クセノポンの手でそれがまとめられた時、当人は、なおも帰還をそつと夢見ていたのだ、と。この作品は、もはや『時代遅れ』となつてのち、いつそう大きな『メモラビリア』に吸収されたが、それは何故なのか——これを理解したければ、クセノポンの経歴中のもつと後の、これに対応した『状況』に思いを巡らさないわけにはいかない。すなわち、当人が実際に追放から呼び戻された、前三六〇年から前三五〇年の間の状況である。この間も『帰還』は、変わらぬ祖国愛の証しとして直接の関心事であつたからである。かれは、ソクラテスへの偽りのない忠誠を高らかに謳い上げたが、そのような賛辞には、アテナイ民主制への自身の『眉唾』の支持が隠しようもなくその顔を覗かせていた。

クセノポンの文学作品の大半は、前三六〇年から前三五〇年までの一〇年間にしつかりと集中し、アテナイへの帰還は、明らかに、当人の心に新たな刺激を与えたにちがいない。『ヘレニカ(ギリシア史)』が書き上げられたと思われるのも、この時期を措いてなく、当の作品は、マンティネイアの戦い(前三六二年)で幕を閉じ、そこに顔を覗かせていたのは、かれ自身も声を張り上げて褒め称える『スパルタの体制』の崩壊理由を何とか説明づけようと腐心する『内なるパトス』であつたからである。『ラケダイモン人の国制』もまた、スパルタの覇権が崩れ去つて後の時期に属している。ここでは、かつてあつたスパルタとその後のスパルタが最終的に比較され、結果として後者は情け容赦なく批判されていたから、そのような点は文句なく裏書きされるにちがいない。前三六九年

に締結されたスパルタとアテナイの同盟は、クセノポン当人をいつそうアテナイに近づけ、ついにはかれは、追放を解かれて祖国に呼び戻された。次いで前三六〇年から前三五〇年の間に、そのアテナイも大半の権力を失つて、第二次海軍同盟は脆くも瓦解した。この国家的悲劇に促されて、プラトンとイソクラテスの後期作品——すなわち『法律』『アレオパギティコス』『平和について』——は、新たに熱烈な教育意図をいやが上にも燃え立たせ、クセノポンも、この運動が掲げる理想に深く共鳴し、『メモラビリア』やいくつかの小品を携えてこれに参加した。すぐれた騎兵士官の義務を論じた『ヒツパルクコス』(ここにはアテナイの状況がしっかりと触れられていた)、これと一続きの作品ともいふべき『馬術論』、そしてまた、公共の歳入を論じた政治経済学作品(もしもこれが——今日に信じられているように——真作であるなら)は、追放からの帰還後にまとめられた晩年の作品群に含み入れられてよいだろう。狩猟を扱つた『ギユネゲティクス』も、最も優れた教育という問題にはつきりと捧げられ、ゆえに、この時期に加えられてよいだろうか。その中で完膚なきまでに攻撃されていたのは、単なる弁論術的・ソフィスト的な教育だつたからである。ここでの実感が如実に抱かれたのは、とうてい、スキルスにおける静かな田舎生活の『お蔭』とは言いがたいのに、この作品の主題のゆえに、この地でまとめられたにちがいない、と思ひ込む者も少なくはなかつた。この作品の基盤にある体験は、むしろ、スキルス滞在期にまで遡るだろうが、そもその作品はあくまでも、アテナイでの積極的な文学生活に属していた。

クセノポンの作品はすべからく、大なり小なり『教育してやろう』という意図に支配されている。このような特徴はしかし、当人の時代の専売特許とも言い切れない。それは、かれの本性的おのずからの表明でもあつたからである。一万に及ぶギリシア兵の遠征でかれの演じた『役割』

は血沸き肉躍るものであったが、その中にも、純粹に「教育的」といってよい感触がまた認められるだろう。できるなら読者に、特定の状況下でどのように語り・行動すべきかを具体的に学んでもらいたかったからである。野蛮な敵意をむき出しにして威嚇する敵兵たちに囲まれて、ギリシア兵は、絶望的な難局のさ中に自身の「内なるアレテー」に目覚め、これを立派に展開したが、読者もそれに倣わなくてはならない。クセノポンはしばしばこう訴えている。わたしの作品にはさまざまな人物や行為がまた登場するが、それらはすべて、わけても軍事面であからさまに提示した専門知識や技術に劣らず、しっかりと真似てもらいたい「手本」にほかならない、と。とはいえ、目を通して深い印象が刻まれるのは、あくまでも「教育」を意図したクセノポンの筆致よりは、当人と同僚の面々が、練達の兵団にすら深刻でほぼ「望み薄」といつてよい過酷な状況下で演じる血沸き肉躍る冒険の数々にちがいない。かれには、自身の頭脳と勇敢さを人前に並べ立てる「厚かましき」は微塵もなかった。その作品は、告げられた「単一の物語」のゆえにいつそう興味を引いて、われわれの共感すら呼んで止まない。すなわち、一万に及ぶギリシアの傭兵軍団は、指揮する面々の大半があるいは切り殺されあるいは捕獲されて、あまたの危険に晒されながら尽きることにない戦いを繰り広げ、ユーフラテス河畔から黒海まで延々と退却の道を辿ったが、その一部始終は、これらの歳月を彩る陰鬱なギリシア史に一輪の花を添える「輝かしい絵」以外の何ものでもなかったからである。

われわれの心をわけても深く揺り動かすのは、クセノポンが、われわれに感化を及ぼそうと企てる当の中身でなく、珍しい異国の人びとが当人に与えた打ち消しがたい印象の方にちがいない。そのような印象は、あまねく箇所幅広く顔を覗かせていたが、その最初は、ペルシアの貴族たちとその雄々しい徳をあからさまに記述した箇所であるだろう。かれ

は、貴族たちの生活を口を極めて褒め称えるが、その真意を識別したいなら、理想的に脚色された『キュロパイディア』の背景に疑義を呈しながら、当の記述をしっかりと吟味しないわけにはいかない。かれの賛美は、いうまでもなく「純粹無雜」とは言いがたい。当の本人は、ギリシア人が対処に苦慮した自堕落なペルシアの面々の裏切り行為に、辛辣な「あざけり」以外の何ものも覚えなかつたからである。『アナバシス』に描かれたキュロスの肖像をどのように眺めるべきか——これに思いを巡らしたいなら、年若いキュロスがもしも存命したら、有名な祖先に劣らぬ見事な支配者であつたらうに……と訴える『オイコノミクス(家政論)』にじつと耳を傾けるには及ばない。そのような肖像を堂々と描いた熱狂的な賛美者は、英雄の名に恥じない年若い王子の悲劇的な死を単に嘆いたばかりでなく、この人物を高く崇めて、古えのペルシアのアレテーを見事に体現した「栄えある最後の実例」とまで考えた。『キュロパイディア』の終わりの部分で、クセノポンはこう述べている。ペルシアの権勢は「衰退の道」をひたすらに歩んだが、それは「メムノン(記憶力に秀でた)」と綽名されたアルタクセルクセス——弟のキュロスが企てたのはこの人物の廢位であつた——の宮廷における「道徳的弛緩」を介して、というほかはない、と。この企てが功を奏していたら、キュロスは、ヘレニズムの最高の諸力と手を携えて、古えのペルシアの理想を再生する冒険の口火を切つたはずで、おそらく、世界の歴史全体も今とは異なつていたにちがいない。クセノポンは、有名なキュナカの戦いでいかにキュロスが華々しく散つたかを克明に物語つたのち、当人の「人となり」も描いているが、それは、わけても気高い「カロカガティア(美にして善)」の完全な手本にほかならない。これを介して図られているのは、読者の面々を促して当の手本をしっかりと模倣させること、そして、真に男性的な徳、見事な振る舞い、高貴な感情等々が何もギリシア民族に固有の専

売特許ではない、とギリシアの人びとに弁えさせること、なのである。ギリシア文化やギリシア的勇気がいかに卓越していたかを信じて疑わないうクセノポンの民族的誇りは、セリフの間からも繰り返し顔を覗かせていたが、それでも当人は、真のアレテーがあまねく平均的なギリシア人に——あたかも「天からの賜物」のように——生まれつき与えられている、などと考えない。かれの手で記述されたのは、最高度に気高いペルシアの面々であったが、そこに目にされるのは——当を得たことに——かれらと関わって学び取られた「事柄」に自身がいかに得心していたか、にちがいない。すなわち、この世のいづこでも真のカロカガティアはあくまでも稀で、そのような人間は、すぐれた作法と高次の教養の「精華」ともいえるべく、しかるべき血統の最高の代表例に十全に現われ出るにすぎない——これが当の事柄なのである。

あまねく人間にはすべからくアレテーがいかなる差もなく共有され、この徳は、等しい市民的権利に劣らずこの世の万人に内在している——前四世紀のギリシア人はこのように主張したが、そのひた向きさは、なるほど気高くあつても往々に実際的といえず、かれらは、先に指摘した「真理」を見失う危険に晒されていた。クセノポンはしかし、体験を重ねてこう納得していた。並みのギリシア人は、自主的な率先と責任ある行為において、並みのバルバロイ（非ギリシア人）をはるかに凌いでいるが、ペルシア人の偉大さは、そのエリート階級が至り着いた驚くばかりに高い文化と人格訓練の見事な「賜物」にちがいない、と。勘の鋭いギリシア人ならこれを十分に弁えていたし、プラトンやイソクラテスなどの同時代の作家はさらにそうであつた。かれらは、教育と教養を論じる中で、エリートの問題こそあまねく文明が抱える中心課題にはかならない、のを当然視していたからである。クセノポンは、ペルシアの偉人たちとその珍しい生き方に大きな関心を抱いたから、おのずと、高次の文化の「秘

密」——しばしば理想主義の教育家連中が見落としがちな——に触れることができた。ほかでもない、ペルシアの貴族たちは、みずからのバイデリア——ないしこれに準じた何か——をきっちり携えていたのだ、まことに易々と、ヘレニズムの最高の事績すら受け容れられたのだ、という……。クセノポンの描くキュロスの肖像には、ざつと二つの特徴が分かちがたく結び合っていた。ヘレニズムへの傾倒と気高いペルシアのアレテーである。キュロスは、さしずめ「ペルシアのアレキサンダー」といえようか。もつとも、みずからが背負うテュケー（運勢）のみは「マケドニアの相方」と大きく異なつて、わが身を刺し貫いた槍は、あのアレキサンダーをも殺傷したにちがいない。非情な槍にあたら生命を奪われなかつたら、ヘレニズムの時代は、おそらくはキュロスと共に幕を開けて、別の方向に歩んでいたのではなかつたか。けれどもそうはならず、前四世紀のギリシア人は、一万人の遠征を記録した『アナバシス』を介して、勇敢なギリシアの將軍（「クセノポン」）が成し遂げた「事績」をまざまざと思い出すことができた。それは、もしもキュロスがクナクサの野に斃れなかつたら、ギリシアの傭兵団が当人を助けて成し遂げさせたであろう事績なのである。ギリシア人は以後、こう実感した。ペルシア帝国は、これを征服しうる最初のギリシア人の手に握られているな、と。クセノポンが、イソクラテス、アリストテレス、デモステネス等のあまねく思慮深い人士たちに固く確信させたのは、この点にほかならない。『アナバシス』は、ペルシアのオリエント文化がギリシアを介して自己の豊かさをいっそう増すであろう可能性を、きっちり訴えた最初の作品にちがいない。そこでは、文化交流の決定要因がペルシア貴族の「バイデリア」に定められていたからである。

ギリシア文化は、みずからの知的中身と様式を介して、あまねく他国のエリートに自身が所持していないモノを常に分かち与えたが、それに

よつて自身の発展にも寄与できた。クセノポンの作品に登場するキュロスは、ギリシア人を浅薄に真似たのみの、退屈きわまる教養人^レでなく、わけても純粹で良質なペルシア人として紹介され、そうした見方は、あのイソクラテスの見解とも軌を一にするにちがいない。イソクラテスは、あまたのギリシア人にはギリシア的教養が具わっていないのに、他国の最善の市民たちは、しばしばこれを吹き込まれていた、と訴えていたからである。クセノポンにしてもイソクラテスにしても——さらには双方に似た他の面々も——たとえボンヤリにせよ、ギリシア文化が影響の地平を押し広げて、ギリシア民族を越えた地点にまで至り着くであろう可能性と、それが実現される具体的状況をそれなりに読み取っていた。ギリシア文化は、各国の最高の文明としつかり結び付かなくてはならない。ゆえにクセノポンは、ペルシアの騎士階級——ギリシアの代々の敵——が、ギリシアの古えの理想である、^レカロカガティア^レによく似たパルティアの体系をきつちり具えていた、のを誤りなく把握できたのだ。事実、そのような比較はさらに次いで、ギリシアの理想をめぐる当人の見解に影響を及ぼし、かれは、ペルシアの貴族階級から引き出した特色のいくつかを、自身が抱くギリシアのアレテー像にせつせと混ぜ合わせた。『キュロパルティア』のような作品を解き明かす^レ道^レはこれを措いてない。ここでは、ペルシアの君主に体现された^レ政治家にして王たる^レ徳の理想が——ギリシアの読者に向けて——紹介されていたからである。

『キュロパルティア』は、そのタイトルに^レパルティア^レという語を含んでいるにしても、われわれの観点から眺めると、いささかの失望を覚えさせないでもない。最初の部分のみはキュロスの教育を扱っていたが、それはしかし、古典的な「教育小説」に程遠く、ペルシア帝国を樹ち立てた^レ立役者^レともいふべきキュロスの、まことに完全な——とはいへ

ロマンチックな——自伝にすぎない。とはいへ、教育的意図がどの頁にもはつきりと顔を覗かせていたから、まごうかたなき^レパルティア^レにはちがいない。キュロスは、みずからの優れた人格と正しい行為に訴えて徐々にその地位を手に入れた^レ君主の手法^レといつてよい。前四世紀のギリシア人は、このような人物を眺めて大きな共感を覚えたが、その事實は、いかに時代が変化したかを如実に物語っていた。しかも、これをまとめた人物はアテナイ人であつて、それを介してこの点は、わけても——おそらくはそれ以上に——そうであつた。われわれが覗いているのは、最も大切に急を要する課題の一つに年若い王子の教育があつた、という時代にほかならない。歴史の上でも有名な君主の偉業と成功を物語るのには、そうした生徒を教育する方法の一つであつたが、プラトンもイソクラテスも、これとは別の方法を試みた。一方は問答法的訓練を選んだし、他方は、王子の義務をめぐる格言と熟慮の束を提供したからである。クセノポンの関心はしかし、ひたすら王子の軍事的武勇に絞られていた。そのような武勇は、厳密に軍事的な観点から、さらには道徳的な観点からも記述されたが、そこには、自身の体験から引き出された^レ妙味^レもしつかりと添えられた。かれはこう考へて憚らない。兵士こそは^レ理想の人間^レにほかならず、当人は、活き活きと健康で、正直にして勇敢、存分に鍛えられているので、自然の風雨にも夷敵にも挫けないばかりか、自身の弱点もしかるべく克服できるのだ、と。政治も安全保障の仕組みも崩れ去りつつある世界で、自由にして自立した人間は、かれを措いてない。クセノポンの描く^レ理想の兵士^レは、制度や法律を顧みないで勝手気儘に踏み躪つて憚らず、あまねく「^レコルディオスの結び目」を猛々しく切り落とすような傲慢で横柄な輩ではない。ざつとこのように、かれの手で描かれるキュロスは、友への愛と民への信を糧として自国を支配する^レ正義の手法^レにほかならない。クセノポンの兵士は、疑

うことなく神を信仰する。敬虔の人」なのである。騎兵将校の義務をめぐる作品で、かれは、かつてこう口にした。おそらく読者は、わたしの口から「神が望みたもうなら（シユン・テオー）」というセリフがなぜそれほど頻繁に漏れ出るのか・・・と訝るかもしれないが、もしも、絶えざる危険に身を晒して生きないわけにはいかないなら、直ちにその真意を了解するにちがいない、と。加えてかれは、厳しい「軍務」を措いて真に気高い人間への最善の教育はない、とも考えている。キュロスに視られる兵士と統治者の一体化は、かれにとって、当然ともいべき理想なのである。

クセノポンは、ペルシア人の教育に大きな関心を抱いたが、それはこの教育が、先にみた気高さや勇敢さを育成する「輝かしい学校」であったからにほかならない。かれは、そのような教育を記述しながら、みずからが「英雄」とみなす人物の自伝を拵え上げたが、そうした主題への関心を最初に呼び起こしたのは、おそらく、あのソクラテスではなかったにちがいない。アテナイでもその他の地域でも上流階級は、長きにわたって、他国の制度と教育組織に強い関心を抱いてきた。クセノポンは、個人的な体験や考察を基に、ペルシアに関わる新たな詳細をしっかりと伝えたが、そうしたペルシア生活の個々の局面は、それ以前にはおそらく、これほど豊富に紹介されなかったのではあるまいか。もともと当人の説明も、満足のいく細目に及んでいないわけではない。ペルシアの教育は、かれの考えるところ、他国のそれを大きく凌駕していた。ちなみに、この場合の「他国のそれ」は、プラトンの描いたような「ギリシア教育」を示唆している。総じてギリシア人は「教育」にさほどの関心を示さなかった。ただしスパルタは別で、クセノポンも、この国をそれ以外のギリシア諸国と同一レベルに置かず、あえてコメントも加えていない。かれはこう口にする。あまねく誰もが子供たちを「放置」して自分

勝手に成育するのを許している、と。そのような面々が大きくなると、法律は、みずからの手元に引き取って自身の処方箋をひたすらに押し付けたが、あからさまに露見したのは、当の本人たちが「法律の遵守」——ギリシアの国々が大きな誇りとし「正義」とも呼び慣わした——という点で十分に鍛えられていないことであった。しかるにペルシア人は、あたかもギリシアの両親がわが子にアルファベットを教えるかのように、いまだ年若い頃からせつせと「正義」を教えたのである。

子供たちが教育を受ける場所——それは、王宮やその他の公共施設の傍らの「自由広場」、すなわち、自由人が集うアゴラにほかならない。取引や商売の類いはすべからく追放され、ゆえに無作法な騒音が教養ある人びとの整然とした振る舞いを乱すこともない（著しい対極をなすのはアテナイ——さらにはギリシア一般——で、アゴラを取り囲む市場や公共施設はあまたの出店や屋台に溢れ、興奮した声高のお喋りや商売繁盛で「騒然」の様を呈していた）。このような配置の工夫は、ペルシアのバイディアを社会共同体にしっかりと結び付けた。この配置を介して教育は「社会の中心」に正しく位置付けられたといつてよい。子供たちの教育を監督するのは、この仕事への適性に鑑みて選び出された「年配者たち」で、兵役年齢の若者たち——つまりは「エフェボイ」——の教育を申し付けられたのは、注意深く選抜された「人生真つ盛り」の成人たちであった。ペルシアの子供には、ギリシアの成人を対象としたような「法廷」があつて、窃盗、強盗、強姦、詐欺、無礼な言説はここに告発された。悪事に手を染めた子供は、法律にかざして容赦なく罰され、罪のない人間を告訴した輩も同じ目に遭った。クセノポンは、そのような法典にみられる固有にペルシア的な特徴を一つばかり指摘した。忘恩に対する厳罰である。忘恩こそは「恥知らず」の根幹と考えられ、ゆえに「大罪」と断じられたからである。そのような点から改めて思い起こされるのは、プラトン

とイソクラテスが、廉恥としての「アイドス」を社会の維持と教育の基本として殊更に強調した点にちがいない。クセノポンはこう考えた。ペルシア人の教育体系を支える本當の基盤は、偉大な実例の「模倣」にこそあったのだ、と。世の若者たちが率先して「至上の法に従う」という姿勢（「従順の徳」）を身に付けるのは、そうした実例を介してのことで、かれらは、年長の先輩たちが同じ義務を常に几帳面に果たしている「姿」をわが目で確かめていたからである。

年若いペルシアの面々が心掛けたのは、なるだけ簡潔な生活であった。学校に携えて行かれたのは、パンと、風味を添えるカルダモンの種と、水の入ったカップのみで、それらを用いつつ全員が、教師に監督されながら共同食事の席についていた。学校教育は一七歳まで続いて、その後はエフエボイとして軍事教練隊に加わり、一〇年にわたる教練が課された。クセノポンは、若い時代に強要される軍事訓練を褒め称えたが、それもこの時代が、固有の世話を必要とする「時期」であったからにはかならない。軍事教練隊は「規律の学校」であった。若者たちは絶えず将校に指図され、その分遣隊は、王の護衛として「狩り」に赴く主君に付き従った。狩り自体は、月に数回は規則正しく実行されたからである。クセノポンはこう考える。ペルシアの人びとは「狩り」をわけても重視するが、それによって、ペルシアの体制がいかに健全であるかも証明されるにちがいない、と。かれは、『ラケダイモン人の国制』や『ギユネゲティクス（狩獵論）』でも目にされたように、狩りに伴う鍛錬的效果を褒め称え、これを、すぐれたバイディアの本質部分とも称している。さらには「正義の実践」と「狩り」といったペルシア教育の両特性に加えて、今一つ、『オイコノミクス（家政論）』では「農事」にも言い及んでいた。

ペルシアの社会は、年齢に応じて四つのクラスに分割されていた。すなわち子供、士官候補生、成人、高齢者である。士官候補生は、両親が

裕福なため仕事に就く必要もなく、白昼から「カロカガティア」の学校に通うことのできる若者から構成され、ここで一定の期間を勤め上げた若者のみが成人（レイオイ）の列に加わって、より後に、高齢者（ゲライテロイ）となることができた。ペルシア国家のエリート層を形造っていたのは、これら四クラスにほかならず、国の全体はかれらに依拠していた。広大な領土を支配するにあたり、王は、かれらを介さないわけにはいかなかったからである。そうしたすべては、ギリシアの民衆の目に「まことに奇妙」と映ったかもしれないが、スパルタ人のみは例外で、かれらは、自身の仕組みとも対をなした大半のペルシアのそれを十分に了解できたにちがいない。今日の読者なら、さしずめプロシアのような軍事国家の「士官学校」を思い浮かべるかもしれない。この学校は、若い将校の団をたえず軍隊に供給し、あまたの少年たちを早い時期から自身の精神の中で鍛え上げたからである。このような比較は、双方の仕組みを支える社会基盤が同一であってこそ是とされるが、その点、双方ともに「封建国家」といつてよい。クセノポンの記述に目を通して見ると、軍事教練隊に加わる資格が「血統のよさ」から「経済的自立」にそっと挿げ替えられたような印象もなくはないが、さにあらず、隊に入った少年たちはほとんど、ペルシアの地主貴族に属していた。

クセノポンは「軍事貴族制」を声高に褒め称えたが、そうした体制がギリシアの地でピタリと当てはまるのは、いかなる国にも勝ってスパルタにちがいない。先にみた物珍しいペルシアの体制も、つまりは「第二の手本」といつてよいだろう。当人は果たして「純理論的な関心」から『キユロバイディア』をまとめようとしたのか、それとも、記述されている理想を本當に押し広げて実現にまで漕ぎ着けようとしたのか——ざっとこう問い掛けてみよう。その場合に、クセノポンのような歴史家でも、生きた時代を考えると、ここでの主題に純歴史的に振る舞ったな

ど、とうてい思い浮かべることはできず、むしろ、こう想像する方がはるかに心もそえられるのではないだろうか。すなわち、かれが執筆を思い立ったのは、スパルタの手に主導権が握られていた時期で、かれは、ペルシアで目にした軍人精神を紹介し、アテナイからの亡命者として祖国の教養人に、この精神が現実には何を意味したかを明示しようとした。と。スパルタをめぐるかれの作品は、これと同じ意図によってまとめられていた。なのに、まとめようと欲していたのは、純然たる宣伝文にほかならない、など、考えるも愚か、というべきで、この点は、二つの作品に添えられた『結びの所見』からも却下されてよい。かれは、『キュロパイディア』の終わりの箇所が目下のペルシアを声高に非難し、この国が崩壊せざるを得なかった理由を諄々と説いているが、『ラケダイモン人の国制』の終わりでも、同様のことが目下のスパルタに試みられている。そのような事態はおしなべて、アゲシラオス王の存命中なら成立しなかつたにちがいない。この王は前三六〇年に没し、その後にくセノポンは贅辞をまとめて、当の本人を『正銘のスパルタ的な徳の化身』と褒めていたからである。両作品の結論部には、この点への歴史的コメントが目につかれ、それに着目するなら、双方をクセノポンの経歴の後半部——つまりはスパルタの支配が『過去の栄光』として消え失せた時期——に位置付けないわけにはいかない。しかも、クセノポンと同じ発想を携えた人間なら、おのずと、当時の政治状況も勘案する姿勢から完全に身を離し、ペルシア教育の精神自体を何とか『不滅化』しようとして心掛けたのではなかつたか。クセノポンという人間は、あろうことか、オリエント世界の奇異な作法や非ギリシア的な専制をせつせと擁護している——このような非難に対して、かれは、その先手を取ろうと繰り返し努めて、まことに用心深く、墮落した当節のペルシア人と、ペルシア帝国が樹ち立てられた往時の騎士型戦士がどれほどに異なるか、の浮き彫り

化にもつばら意を注いでいる。かれはこう考えた。贅沢三味のオリエント様式は、しばしば『ペルシア風』と噂されてきたが、実際には『メディア風』にほかならない、と。ペルシア人は自身の卓越性を確立するや、ただちにメディア帝国を打ち負かして併合したが、メディアの敗北した理由の一つは『オリエント様式』にちがいない。キュロスの時代のペルシア人は『奴隷』でなく、すべてが同等の権利を携えた『自由人』であった。キュロスの統治中、その精神も新国家の仕組みの中に生き続けたが、これを否認して自身の転落を急ぎ立てたのは『後継者の面々』といってよい。クセノポンはこう考える。ペルシア人の教育は、往時の輝くアレテーの最後の『名残り』であり、それを代表する唯一の現存物にちがいない、と。目下のペルシアがいかに衰退してしようと、かつての帝国の創設者と過去の栄光は不滅化されてよく、加えて目下のこの国も、やはり不滅化に値するのでは……——かれはこう信じて疑わない。

『ラケダイモン人の国制』というクセノポンの作品は、中身において『キュロパイディア』にわけても対応していた。作品の主題は、特定人物の個人史でなく政治的な仕組み全体の描き上げであつたが、双方はともに『バイディア』から出発し、それを介して、みずからのテーマに接近する『固有の見地』を明らかにする、という点でよく似ていた。厳密な意味での『教育』が扱われているのは、ともに最初の二、三章にすぎないが、それでもクセノポンは、ペルシアでもスパルタでも国の基盤となつているのは『教育』を描いてないと考え、それが及ぼす影響に繰り返し触れてもいる。双方の国家のそれ以外の制度も、単一の教育組織の『論理的帰結』といった特徴を開示していた。もしも『教育』という言葉に、両国の通例である『成人生活の管理』までも含み込ませるならば……われわれはすでに、入手可能な最も初期の文献——ティルタイオスの詩片——に基づいて、スパルタに固有の市民的アレテーの理想を解き明

かしてきた。この詩人の手で、詩片がまとめられたのは、メッセニア戦争の最中であつて、新たなスパルタの理想はこの時期、途方もない危険に脅かされつつ、いつそう古くて貴族的な諸原理に抗してひたすら自身を訴え続けていた。そうした理想を手短かに言表すると、こうなるだろうか。公共の善に向けた市民のわけでも大きな貢献は、自国の防衛に積極的に参与することを措いてなく、国家における自身の権利は、地位や富等々の特権によらず、この至上の義務（＝自国の防衛）を果たす際の「勇気」をもつて測られなくてはならない、と。スパルタの社会共同体は、生き残る上でも絶えず戦わなくてはならなかった——あるいは、戦う準備を絶えず整えていなくてはならなかった——から、個々人と国家をめぐるとの基本的発想に何らの疑義も差し挟まなかった。この発想は、数世紀を経るうち、固有な公共生活の組織を見事に開花させた（残念ながら、そうした開花の各段階を告げる情報は皆無に近い。クセノポンとプラトンの時代——それにずっと先立っても——スパルタ世界は完全に仕上がっていたが、それにまつわる価値の高い歴史情報が今日まで伝えられているのは、もつぱら、クセノポンのような作家たちが抱いたこの国のバイディアへの関心の「おかげ」というほかはない）。その他のギリシア人は、スパルタ市民を鍛えてこの世で最高の兵士にまで仕上げる、という同じ目的にスパルタの仕組みがいかに奉仕していたか、を驚きと賞賛の目で眺めたが、かれらには十二分に理解されていた。これが成就したのは、絶え間のない訓練と巧みな操縦によるのでなく、子供時代の最初から倦まず弛まず「人となり」が造り上げられてきたお蔭なのだ、と。そうした教育は「軍事的」であつたばかりでなく、最も広い意味で「政治的・道徳的」でもあつた——とはいへ、ギリシアの他の地域で「政治的・道徳的な教育」が意味したのと逆の中身であつたけれども——。どのようなギリシア国家にも、アテナイ民主制の支持者に並んで、スパルタ精神を奉じて止まない

賛美者は目にされた。プラトン自身は、スパルタの理想を容赦なく批判したから、そうした賛美者の代表とは言いがたい。かれが賞賛したのは、スパルタ生活の全局面を一つの指導原理が貫いてブレない論理的徹底性と、共同体の精神を形造る上で「教育」は欠かせない、のをスパルタの面々が弁えていた点を措いてない。クセノポンは、プラトンに遥かに勝つて、骨の髄までの「スパルタ鼻祖」——貴族階級にわけても目にされた——の正銘の代表にちがいない。

かれは、祖国への熱狂的な忠誠にもかかわらず、目下のアテナイ民主制を容赦なく批判し、その批判は、しばしば『メモラビア』にも顔を覗かせている。これを介して当人は、アテナイの政治的ライバルでもあつたスパルタの多くの事柄を褒め上げたが、それも、そうした事柄を措いてアテナイで未解決のままに放置された諸問題を解決する「良策」など見当たらない、と考えたからにはほかならない。当時の民主制の災いはすべからず、かれの見るところ、ただ一つの源から流れ出ているように思われた。ほかでもない、個々人の不自然なまでの「自己主張」がそれで、各人は、あたかもこう考えているかのように見受けられた。民主制下の市民の手には、果たすべき義務の類いはなく、享受すべき特権のみが残されているのだ、と。かれらはこう信じて疑わなかった。国家に保証された特権をしっかりと握って離さないこと——自由の本質はこれを措いてない、と。クセノポンは、みずから掲げる厳格きわまる軍事的規律の理想に照らして、そのような義務感と責任感の自堕落な欠落にわけても「義憤」を覚えたにちがいない。当人の政治思想の起点にあつたのは、個人的理想の実現を是とする個々人の権利でなく、社会共同体の存続を可能にする外的条件の方であつた。当時のあまたの思想家は、アテナイ民主制の欠点ともいうべき、敵意と妬みに溢れた現実世界の只中で当の市民が自国のために戦うのを厭い渋る、という「呆れた態度」を口をそ

ろえて批判したが、この欠点はクセノポンの目にも、まことに馬鹿げた子供っぽい「愚かさ」と映つたにちがいない。それを介してアテナイは、まもなく、自身の誇りとした「自由」をあらかた奪い去られたからである。スパルタの紀律は、いうまでもなく、市民の大半が自発的に決定して導き入れたわけではない。それ自体は国家の立法構造にまで仕上げられたが、これを成し遂げたのは、クセノポンに従うなら、半ば神格化されたリュクルゴスという一人の天才にほかならない。クセノポンは十二分に知悉していた。何世紀にも亘つて多少とも途絶えることなく打ち続いた戦争状態に対処するべく、スパルタの人びとが、異国的な被征服民を支配する「恒久の要塞」として、なぜこれほど旧来の生活を手放さなかつたか、を。スパルタの世界は、かれの中では、それ自体において完璧な「政治的芸術作品」として扱われ、その独創性が高く褒め上げられ、他の国々が真似てよい「手本」とも信じられていた。もつとも、あまねく細部に及んで文句なく真似られるべき、とまでは考えられていなかったけれども。ならばギリシア人は「真似る」によつて何を意味したのか——この点を理解する「最善の鍵」は、プラトンの政治作品から与えられるにちがいない。おしなべてギリシア人には、固有の本性と条件を具えて論理的に構成された芸術作品（ないし思想作品）を手にして「ユニークな固有物」として扱う傾向が、今日のわれわれに比べて遥かに少なかつた。かれらは、特定の体制下での「徳」を理解する必要に迫られるや、ただちに、その体制下で「善にして有益」と思われたすべてを真似ようと腐心した。スパルタは、クセノポンにとつて、偉大なギリシア国家の全体を見渡しても類例のない、キュロスの兵營の「軍事的徳」を体現した典型例にほかならない。

当時には一般的であつた個人主義者や自由愛好家の面々は、スパルタの生活様式とその教育を「完全なパラドックス」と考えないわけにはい

かなかつたが、この点は、クセノポンにもよく了解されていた。かれは、リュクルゴスの立法が果たしてスパルタを益したのか否か、の決定を思慮深い読者の手にあえて委ねて、この人物の体制に覺えた自身の「賛意」を通常は慎重に覆い隠しているが、きつと、こう見越していたにちがいない。わたしの読者はそれぞれに意見を異にして、多くは、これらの便益を手にする上で払われた代価が「あまりに高かついた」と考えるかもしれない、と。そしてこう予想する。わたしと時代を同じくする面々の大半は、やはりこれを是認するだろうし、そうした是認が目に見えるのは、わたしの作品が前提した文学的関心など「不必要」と考えて憚らない——おそらくはスパルタのような——都市や国家ばかりではあるまい、と。リュクルゴスの立法は果たしてスパルタを益したか？の問いは、純イデオロギー的なものでもない。クセノポンは、啓蒙型の民主的環境には時節はずれの理想を支持したことから「ロマンチックな輩」と呼ばれたが、実は「空想的な詩人」でなく「リアルな実際人」であつた。かれは、兵士としての初期の経歴からスパルタに共感を覺えたが、この共感は、大地主で農夫でもあつた自身の政治観を介してさらに膨れ上がったにちがいない。スパルタとそこに暮らす面々は、かれの「お馴染み」であつた。都市の労働者階級に端を発した社会問題を何とか解消しようと勵まれるあまたの試みなど、田舎と農夫には「無益」というほかはない——この点は、かれの目にまざまざと焼き付けられ、エリスの片田舎で農事に勤しんでいた間も「政治闘争」——他の場所と同じくここでも目にされた——に積極的に身を投じた。そうした点なら『ヘレニカ』の終わりの数巻も漏らしている、エリスの党派政治をめぐる正確な情報から存分に覗えるのではないだろうか。かれは、この主題に向けて不釣り合いなまでの頁を割きながら、目撃した者の權威に訴えて連綿と語っていたからである。保守的なスパルタと民主的なアテナイの影響は、

これらの社会闘争でも一役を買って、ためにクセノポンは、双方の効果をじつくりと研究する得がたい機会に恵まれた。レウクトラの地でスパルタが敗退し、後を継いだテバイは民主運動を展開したが、その運動も、農村地帯のペロポネソスではむしろ真新しかった。ペロポネソスの住民は、スパルタに導かれつつ何百年も特定の生活様式を保ち続けたが、この運動は、そうした慣性からの「巢立ち」以外の何ものでもない。メッセニアの住民もアルカディアの住民もこぞってスパルタの体制から離脱したが、その後も、保守派の面々はスパルタの側に就いて行動を共にし、エリスでも、アルカディアを中心とした拡張論者的な新影響はほとんど迎え入れられなかった。アテナイは、テバイの急激な勃興を気に病んで、面目を失ったスパルタと同盟したが、これは、クセノポンの目に「無上の幸運」と映ったにちがいない。それを介して——それもアテナイの軍勢がテバイに対抗してスパルタの側に立つて何度も戦いを繰り広げた後はとりわけ——スパルタの状況をめぐる静かで批判的な記述は、いつそうアテナイの読者層に受け入れられ、かれも、アテナイの代々の敵であるスパルタを記述して「もしかすると・・・」などの政治的嫌疑に身を晒す危険が、以前に比べて大幅に無くなったからである。

スパルタの教育組織としての「アゴゲー」の詳細は、あまりによく知られているので、ここにあえてクセノポンの説明から書き写すには及ぶまい。その本質的特徴はざっと次のようになるだろうか。すなわち、

(その一) 健全な子供を育てる教育の公的な監督は、きわめて早く、妊娠と受胎の頃から——否それ以前から——始められた。

(その二) 優生学的な出産を介して民族の質を落とさない努力に、多大の関心が払われた。

(その三) 子供の教育は、他の国々のように両親や奴隷の乳母ないし家庭教師でなく、国の任命した正規の教師に委ねられた。

(その四) あまねく教育を担当する「パイドノモス」と呼ばれた至上の教育機関が存在した。

(その五) 少年や若者は「教練隊」に組み入れられたが、若者の属する隊は年若い子供のそれと切り離されていた。

(その六) メンバーの中でもいっそう頼りになる面々が、それぞれのグループを個々別々に統括した。

(その七) 少年たちに施された食べ物と衣服はまことに粗末で量も少なく、ゆえに、かれらの身体は頑健になった。

(その八) 教育自体は国家の権利として成人初期まで続けられた。である。

これらの多くは、今日の読者には「大袈裟で未熟」と映るかもしれないが、アテナイの哲学者たちは、それらの底に横たわる次の原理の「健全さ」をしっかりと了解した。すなわち、およそ教育は国家や都市に引き継がれて、公的に任命された機関の手で十分に監督されなくてはならない、という原理である。これ自体は理想国の設計プランに組み入れられ、哲学者たちは、当の原理に手を貸して全世界のほぼすべてを征服させたといつてよい。教育はあくまでも国事であるべきだ——この前提条件は、スパルタの果たした文化史へのリアルな寄与にほかならず、その重要性はいくら評価してもし足りることがない。スパルタの体系の主要点の第二は、若者たちに強要された軍事訓練で、これは、かれらの教育の本質部分としてことさらに重視された。そのような訓練は、民主的なギリシアの諸国家に勝ってスパルタでいっそう長く継続し、万人が共有した教練や共同食事（いわゆる「シシティア」）を介して成人生活に引き継がれた。このような点も、すでに見たように、プラトンにしっかりと採用されている。

クセノポンと同じ発想を抱いた人間なら、スパルタの体制がレウクト

ラで致命傷を負った際に激しいショックを味わったにちがいない。向かうところ敵無しのパルタ軍は、この地で惨めな敗北を喫したからである。『ラケダイモン人の国制』における結論部の数行で、かれは、当時のスパルタ人にみる貪欲、野心、酒池肉林を激しく非難してこう仄めかしている。これらの悪徳に促されてかれらの覇権も立ち去ったのだ、と。かれのまとめた『ヘレニカ』というギリシア史で意図されているのは、ツキュデイデスの歴史を単に外的に引き継ぐのでなく、その精神を継承して歴史の出来事の背後にある「必然」をしつかり説明することであったが、その中で当人は、スパルタ人を容赦なく批判して憚らない。かれらは、ギリシアに覇を唱えた間に数々の過失を犯したからである。みずからの宗教的見地に立って、クセノポンは、そのような権力の高みからの悲劇的転落を解釈して「神の妬み（ネメシス）」以外を思い浮かべることができなかった。これ自体は、あまりに気高すぎる抱負に下された天罰であり、張りすぎた弓の反動行為というわけである。かれは、一方ではスパルタを褒め称えながら、他方では、スパルタ人の過酷な圧政がアテナイ人の違和感を呼び覚ますに十分であったのを、まざまざと思い出させたが、にもかかわらずスパルタの没落後、この国のパイデイアをめぐる執筆はいささかも邪魔されず、むしろ、『キュロパイデイア』でペルシアに与えたのと同じく「条件付きの賞賛」ながら、それは、きつちりと褒め上げられている。この教育作品でなくても「教育的」といえるのは、実に、当人の説論的姿勢を措いてない。かれの『ヘレニカ』は、それと同じ意味において、ギリシアのパイデイアという大建築を構成する「部分」と考えられてよいだろう。この作品の価値は、無比の偉大さを誇る先人のトキュデイデスがまとめた「歴史」と違って、いわゆる「事実の披露」にあるわけではない。かれの教えは、一種の伝道的な熱意を込めて、ひたすら自分に引き付けてあからさまに提示された。レウクトラ

でのスパルタの敗北とペロポネソス戦争が終結した折のアテナイの没落は、かれの人生の最も大きな歴史的体験の二例で、合体して「正義に根ざした神の世界秩序」へのクセノポンの信仰をしつかり形造っていた。

ソクラテスをめぐるクセノポンの作品——いくばくかの対話篇と師への個人的追憶——は、当人の作品中でも特別なグループに収められてよい。これらは「教育」という主題にどう関わっているのか——この点にはあえて指摘するに及ぶまい。クセノポンには、物事の倫理的局面・思考を刺激する局面に着目する傾向がおのずと具わっていたが、その人格にわけても衝撃を及ぼして当の発現を促したのは、ソクラテスであった。われわれは『メモラベリア』という追想記を査定して、これこそ、ソクラテスをめぐる知識の基盤となる歴史的証拠にはかならない、と言い及んでいたから、作品類を改めて点検し、これらにはパイデイアに関わるクセノポンの発想があまねく映し出されている、などと繰り返すには及ばない。そうした作品には果たして「歴史的証拠」としての価値があるのか——この点の批評には、クセノポンの「心」をめぐる判定もおのずと含まれていた。かれは、自身でも望んで止まない「アテナイの復讐」を志す「隠れた時代の教師」にソクラテスを仕立てるべく、おのれの持論をこの人物からせつせと提唱させているが、それを目にするのは喜びに耐えない。ソクラテスが与えるのは、騎兵将校の義務をめぐる、さらには用兵のイロハをめぐる専門の軍事的助言にはかならない。かれは、いまだ年若いペリクレスに逢い見えるが、のちにアルギヌサイ沖の海戦で指揮官の一人を務めたこの若者は、アテナイの停滞が打ち続く中で深い幻滅を味わっていた。だからソクラテスは胸の内をさらけ出して、固く信じるところを率直に披歴した。もしもアテナイが厳しい軍事的規律を導入し、アレオパゴス評議会の道徳的權威を今一度承認したなら、おのずと将来に大きな権力を手にできるだろう、と。これらの発想は、言

うまでもなく保守派の綱領から借り受けられ、あのイソクラテスからも公的に支持された（のをわれわれが目にする）時期に提唱された。すなわち、第二次海軍同盟が解体に瀕し、思慮深い人びとなら、これに対応した一連の出来事——たとえばペロポネソス戦争の最終局面におけるアテナイの崩壊——をおのずと思い浮かべた。時期である。クセノポンはしかし、『オイコノミクス』ではもつと自由にソクラテスを用いて、自身の発想を代弁させていたから、これには、特別な注目を払うだけの価値があるだろう。ここでは、教育をめぐるクセノポンの一般原理が、当人にも、本質的と考えられた一点に——すなわち、文化（＝精神の耕し）と、農業（＝大地の耕し）の結び付きに——わけても言及しながら、しっかりと展開されていたからである。

ソフィストたちはしばしば、みずからの教育論を基礎づけるにあたり若者の教育と大地の耕作を対比した。とはいえ、文明の起点が大地の耕作と穀物の収穫にあるのは正しく認知していたが、教えるところは、いまだ都市の生産品に留まっていた。ヘシオドスが『仕事と日々』で、田園生活とその規則を倫理の起点に据えた。時代から遙かに遠い処にいたのである。ギリシアの文明を実質的に支配していたのは、ポリスにほかならず、「田舎風」の意味するところは、クセノポンの時代なら「教育も受けずに無教養な」と何ら異ならなかった。農事が以前の尊厳を保つなど、ほとんど不可能に思われた。クセノポンは都市で生まれ育ったが、本性と運命に導かれて、むしろ田舎で暮らしがちであった。そして、こう感じたにちがいない。わたしを支えていた辛くて技術的な職業（＝軍務）と文学的教養の間に、精神上の繋がりを、見い出さなくてはならないな、と。都市と田舎の葛藤は衝撃的であったが、その実際が文学の世界に登場した最初はこれを措いてない。アテナイの古喜劇も、なるほどこの問題に触れてはいたが、最新式のソフィスト教育と田園生活の伝

統様式がいかに適応しがたいものであったか、を明示したにすぎない。しかるにクセノポンの『オイコノミクス』には、新たな精神が目にされた。自作農と小作農の世界はみずからの価値を自覚して、少なくともいい、文明への寄与を証明し、ここに登場している。田舎愛も、やはり同じく、ヘレニズム風の田園詩にみられるセンチメンタルな、質朴さから——さらにはアリストパネスの描く農村場面の、田夫の笑劇から——大きく隔たっていた。この田舎愛は、みずからを完全に確信し、自身の世界の重要性をことさらに言い立てない。正銘の農夫という事象はあえて一般化に及ばないけれども、クセノポンの作品で、大地が、人間生活を養い育てる不朽で永遠に若い、根なのだと紹介されているのは、どこまでも正しい。ひたすらに狭くて刺激に満ちた、前景の裏に、都市の活動や文明と競い合いながら、静かで、幅広い、快適な田園の世界が延々と広がっていた。クセノポンの作品にはさらに、ソクラテスの教育理想がいかに、永遠の生命を具えていたか、も示されていたが、この作品の価値は、都市の城壁の、外側の世界（＝田園）を広く紹介してくれた点にあるだろうか。それは、徹頭徹尾、都市の人であったソクラテスが、あまたの樹々は何も教えてくれないという理由で、あえて入るのを差し控えた世界でもあった・・・

「エコノミー（ないしは家政）」の本質をめぐる導入部の会話は、ソクラテスとクリトビュロスを通じて、農事（ゲオルギア）というテーマに向かわせた。この作品の主要部分は、ここでのテーマをめぐる論議にほかならない。クリトビュロスはソクラテスに願ひ出て、自由民としての自分にはどちらの実践活動と知識がわけても気高く最もふさわしいか、をどうか説明くださいと訴える。双方が躊躇なく同意するのは、ギリシア人が、手工芸品の取引と呼ぶものは自由民にふさわしくない、ということであった。それらは、さまざまな国でそう高くも評価されず、長

くて不健康なデスクワークを要求して身体を弱らせ、心も鈍らせたからである。ソクラテスが推奨するのは「農夫の生活」で、論議の流れに沿って驚くほど多量の農業関係の専門知識を紹介したから、クセノポンは、これを特別に理由づける必要があるな・・・と実感した。農事への関心を幅広く根拠づけるべく、さらには、そうした関心が社会的に野卑でないのを明示するべく、ソクラテスは、ペルシアの王たちという具体例を引き合いに出した。かれらには、こう考えられていたからである。軍事に並んで価値のある仕事はあくまでも一つ、野原や農園をせっせと耕すことなのだ、と。クセノポンがこの情報を手に入れたのは、ペルシアに通じていたからにはかならないが、それにしても、キュロスの驚異的な大庭園をめぐる長くて詳しい説明がソクラテスの口からこぼれ出ると、なにやら「奇異」に聞こえなくもない。大庭園の説明には、スパルタの將軍リュサンドロスをめぐる個人的な思い出も付け加えられていた。この將軍は、サルデイスを訪れた折にキュロスの案内で大庭園を見て回り、キュロスがこう漏らしたのを耳にしたからである。わたしはここで毎日の汗を流し、樹々と灌木をわが手で植え、それらの成育にあれこれと思いを巡らすのだ、と。リュサンドロスは、こうしたすべてをメガラの友人に告げ、その友人はソクラテスにそれを伝えた——ここでの想定はこうなっている。クセノポンは（しばしばプラトンも試みたように）「師の口」を介して語っているが、そのような工夫で仄めかされているのは、本人が、リュサンドロスから直接に耳にした、という点にちがいない。リュサンドロスに示された本人の姿は、おそらく、一人ものギリシア兵を導きつつ広大なアジアを横切つて退却した「勇敢な將校」を描いてない。かれらは共に「キュロスの友」であったが、クセノポン以上に、斃れた王子に向けたリュサンドロスの「追憶」を懐かしんだ人物はいなかったのではなかったか。のちにかれは農夫となったが、その際、こう実感し

たにちがいない。ペルシアの伝統を褒めてよい新たな理由は、軍事と大地愛の一体化にあったのだ、と。

クセノポンはこう考えた。ソクラテスがなぜ農業の細目にこれほどの関心を抱いたか、を理由づけるのはかなりの難事だな・・・と。この点をうまく切り抜けるべくソクラテスに、著名な田舎の大地主との「会話」を繰り返させているが、大地主に与えられた名は、意味深長にも「イスコマコス（イスキュロス+マケル：戦闘で頼りになる）」であった。ソクラテスはこう口にしていく。イスコマコスについては、正真正銘のカロカガティアの体現者であるとの評判をいたる処で耳にしていた、と。クリトビュロスがソクラテスに求めて、お願いですから「カロカガティア」の本質を規定してくださいと訴えたとき、ソクラテスにできる最善の答えは、実際に出会ったイスコマコスの「人となり」を述べ上げる以外になかった。カロカガティアという言葉は、徳と気高さを凝縮した「典型」として誰もが用いながら、一般に、その意味するところが概念化されていなかったからである。目下の会話の主人公は、むろんのことイスコマコスで、ソクラテスは、その「人となり」を引き出すであろう問いを発するのみ。しこうして、正銘のカロカガティアと判明したのは「よき農夫の生活」であった。かれの仕事は、真の快感と豊かな共感に満ち、その心も尽きざる温かさに溢れていたからである。このように記述できたのは、少なからざる個人的体験のお蔭というほかはない。この記述は、かれの理想とする人間や農夫の「肖像」とも結び付いていて、イスコマコスは——容易に分かるように——詩にまで理想化されたクセノポンの「自画像」といつてよい。なるほどかれは、ここでの手本的人物は「わたし」なのだ、などと主張していないが、作品を貫いて仄めかされているのは、ペルシアの貴族が「戦士と農夫の結合体」であるのに似て、農事を介して学ばれる事柄と軍事を介して学ばれるそれはいささかも異なる

らない点なのである。『理想の農夫』の名で示されるところは、これを措いてない。クセノポンにみる文化の理想は、いうならば『農夫の能力と献身+兵士のそれ』と記されてよいだろうか。

パイディア自体は『オイコノミクス』でもしっかりと論じられている。農事における成功はつねに、クセノポンには、単に農夫ばかりでなくその妻や召使たち——わけても家政婦や下働きの面々——をふさわしく教育した結果のように思われた。だからこう考えたのである。農夫の主たる義務の一つは、家族の『教育』にあるのだ、と。これこそ、農事が何を意味するか、をめぐるかれ固有の見解であると保証されてよいだろう。農夫にとって何よりも大切な生徒は『妻』にちがいない。妻の主たる関心は農園にあつて、まさに『巣箱の女王蜂』なのだ、とも記されていたからである。いまだに経験も浅い一五歳の少女ながら、かの女は、母親の手厚い保護から一挙に連れ出され、家と地所の『女主人』にまで仕上げられなくてはならない。夫が施す教育の課程は、むろん必要この上なく、イスコマコスも、次のように思い込んで、自身のカリキュラムに得意満面である。若い妻にして子の母は、夫の卓抜な知識と『人となり』からすべてを学び取りたいと願って止まないのだ、と。かれは、果たすべき義務を妻に語り始めるが、それは、新たに困難な課題に着手して誇りと幸せを感じて貰いたかったからにほかならない。対して都会人の妻は、あまたの召使にかしずかれ、代わり映えのしない単調な家事を繰り返して、着飾るのに余念がなく、せつせと化粧してゴシップ話にうつつを抜かず、といった受身的な生活に明け暮れて、大きな農家には『無用の存在』と考えてよいだろう。もしもクセノポンが、田舎の名士でもある大地主の妻の教育をこれほど克明に描き出してくれなかったら、ギリシアの女性に対するわれわれのイメージは、わけても本質的で優れた特徴の多くを欠いていたにちがいない。この時代の女性の解放と教育に

思いを巡らすなら、ごく普通には、エウリピデスの悲劇に登場する雄弁で知識に溢れた婦人たちしか思い浮かばないのではないだろうか。けれども賢明なメラニツペと、狭く限定された関心領域しか携えないアテナイの平均的な女性といった『両極』の間には、みずからの頭で考えて行爲する、幅広い可塑性を具えた『理想の女性像』も横たわっていて、これこそ、田園生活と文明という『極上の伝統』でクセノポンが記述したものにほかならない。そのために当人が為したのは、おそらく、この像に具わる伝統的な義務をひたすら合理的に説明する以外になかった。もつとも、そうした伝統に含まれる教育的中身は、農事と同程度に古い歴史を背負っていたけれども……

妻は、クセノポンの考えるところ、夫を支える正銘のパートナーといつてよい。かの女は、女主人として家事を司どり、夫の方は、農場であまたの小作人を指図した。かれは、農場から家に運ばれるすべてのものに責任を負い、かの女は、それらを蓄えて活用する役目を任された。かの女は、子供を育て上げてしっかりと教育しなくてはならない。さらには、貯蔵庫や台所を管理してパンを焼き、糸を紡がなくてはならない。そのようなすべては神と自然が計画なされたところで、神と自然は、男性と女性に異なった仕事を割り当てられた。女性は内気なため、穀物一般の面倒をみる仕事にいつそう適し、対して男性は、勇敢であるから、野外仕事が生み出す過失や失敗にしかるべく対応した。新生児を愛しんで世話するのは女性の天賦で、男性の方は、暑さにも寒さにもいつそう容易に耐え、骨の折れる長い旅路も厭わず、あえて武装して自身の地所をひたすらに守った。みずからの仕事を個々の召使に割り当てるのは妻の務めで、かの女は、そうした仕事があまく運んでいるか否かをしっかりと見張った。さらには、食べ物にも気を配って、農場の周りに病んでいる者がいると、誰に対しても医者となった。いまだ経験の浅い下女たちに

糸の紡ぎ方やその他の家事技術をせつせと教え、はたまた、善良な家政婦を鍛えて頼り甲斐のある「助手」に仕立てたのも、かの女である。イスコマコスがわけても重視したのは、妻を教育して整頓好きにさせることだった。整理・整頓こそ、大所帯を切り盛りしていくのに不可欠だったからである。当人が記述しているのは、たとえば部屋の整理、各種の料理用具や食卓用具、日常ないしは特別な場合に用いるリンネル（亜麻布）等々であったが、その徹底性は、ギリシアの農家の「内側」を覗き見る得がたい機会を与えてくれた。若い妻へのパイディアの体系が目ざしたのは、当人の健康と美を保つ諸々の方法をめぐる教育課程にほかならない。イスコマコスが理想とする「田園の妻」は、そうした点でも、ひたすらに流行を追いつめる都市の婦人たちと大きくかけ離れていた。白粉も化粧もまるで必要がない——これをかの女に請け負いながら、イスコマコスはそれに代えて、瑞々しくてしなやかな身体の美をこそ入手すべきだと繰り返し訴える。このような美なら、かの女は、みずからの仕事にせつせと勤しむ中で「都市の婦人」よりも容易に手にできるにちがいない。これと同じくクセノポンが説明しているのは、農園での家政を分担する小家族に不可欠な「その他の事柄」をいかに教育するか、であった。家政婦ならしつかりと鍛えられて、頼られるに足る、自制的効いた、忠実な存在となるべきで、間違つても、忘れっぽくて不注意な存在にならなつてはならないし、農園監督なら、主人には陰日向なく献身的に尽くし、それ以外の連中には、気配りを怠らず巧みに指図できなくてはならない。もしも主人が監督に、みずからの管理下で倦まず弛まず家事に勤しむように本気で教え込みたいなら、そもその「手本」を示すことから始めなくてはならない。すなわち、自身の農園や家畜がいかに豊かな実りを齎そうと、わが仕事の手を抜くのは許されない。また、ひたすら早起きに努めて、せつせと農園を見回らなくてはならないし、

その注意は、すべてに及んでどのような漏れもあつてはならない。かれの仕事に要する特定の知識は、他の職業に比べると簡素ながら、軍事に劣らぬ手順に加えて、効果的に導いて指図する兵士の能力もしつかりと求められた。もしも顔を覗かせて、労働者の面々がその筋肉をまるで引き締めず、いつそう規則正しいリズムで仕事に励まないなら、大地主は、みずからの仕事に欠かせない「一つの能力」を欠いているといわなくてはならない。その能力は、自身の仕事の成功のすべてを司つて、そもその領域内での自身の位置を真に「王者に相応しいもの」にしてくれるのに……

『オイコノミクス』でクセノポンが描く「第一級の農夫」に人格化された文化理想をさらに補足して完全なものに仕上げたいなら、『キュゲネティクス』という「狩り」をめぐる作品にも目を通さないわけにはいかない。この作品は、いつそう進展の度を加える技術文明に大きくは属する「特定タイプの活動」の諸規則を定めた、単なる専門的な入門書ではない。そこにはなるほど専門知識が満載され、専門家的な態度や意図もいくらか目にされたが、クセノポンの真の目的は、いつそう高い処にあつたからである。かれ自身は「熱烈な狩人」として、こう信じて疑わなかつた。わたしの性格全体と生きる姿勢にこの上なく生産的な影響を及ぼしたのは「狩り」を描いてない、と。かれは『ラケダイモン人の国制』でも「狩り」の価値を同様に高く評価し、『キュロパイディア』では、そのような「狩り」をペルシア教育の動かざる一部とも記している。プラトンも『法律』で、教育をめぐる条文に「狩りの実践」に向けた項目をいくつか含ませていた。とはいえ、これに触れた数行は、終わりの部分でごく無造作に、数字や天文学をいかに教えるかの法律に次いで、体育や軍事訓練の規則からもあまりにかけ離れて付け加えられていたから、のちに挿入されたのだ、と推測してよいかもしれない。プラトンは、クセ

ノポンの教育体系におけるこの「ギャップ」に注意を振り向けたが、それも、クセノポンの作品が世に現われたからで、『キユネゲティクス』の出版は、プラトンが『法律』をまとめていた期間と考えられてよいだろう。

そうしたわけで、いささか本題を逸れてざっと『法律』に触れておきましょう。教育に向けた立法プログラムに言及した結論箇所、プラトンは、法に適ったパイディアの様式として「狩り」を認定してよいか否かを論じているが、そこには、次の二点が含まれていたように思われる。すなわち、クセノポンの『キユネゲティクス』に似た形で「狩り」を紹介した他の作品がすでに存在したこと、プラトンはそして、われわれの性格を鍛える上で「狩り」は大きな価値をもつ、というクセノポンの作品の主張を受け容れる気になっていたこと、である。プラトンはしかし、こうも感じていた。もしもこの点を受け容れるべきなら、ここでの「狩り(テラ)」という言葉——いくつかのかなり異なったタイプの活動を安易に混合させていた——の意味をスッキリさせて、この名前に適さないすべてをこの観念から切り離さなくてはならないな、と。かれには、世に「狩り」と呼ばれているものがすべからず「パイディア」であるなど、断じて認められなかった。それでも「狩り」をめぐる法律はあえて定めず、代わって——しばしば『法律』でも目にされたように——さまざまな狩りへの賞賛と非難をしつかりと法文に挿入した。容赦なく非難されたのは——網を用いたにせよ竿を用いたにせよ——あらゆる魚類の捕獲であり、さらには鳥類の捕獲であった。これらのスポーツを紹介して「人となり」はまるで強化されなかったからだ、それらを除くと、あとは獣類の捕獲以外に何も残されていない。これもしかし、闇にまぎれて網や罫に訴えるのでなく、堂々と白昼に為されなくてはならない。いやしくも狩人なら、馬に乗って獵犬を従えるべきだろう。その場合に

は、おのずと肉体的な汗を流さないでは済まないからである。魚や鳥の捕獲はクセノボンでも等閑に付されているが、プラトンでは、そうしたクセノポンをさらに越えて、網や罫までもしつかり禁じられていた。クセノポンは、獵犬の訓練と活用をめぐる細々と指図しているが、他方、狩りに勤しむなら馬に乗るべきだ、との文言はどこにも目にされず、ゆえにこれは『キユネゲティクス』を「偽作」と判定する証拠にしばしば用いられてきた。というのもこれは、アテナイの紳士たちが狩りに勤しむ具体的な方法にはかならず、クセノポンのように熱心な乗り手があえて「馬」に言及しないのは「奇妙」に思われたからである。けれども、この作品が第一に意図しているのは、どのようにクセノボン自身が狩りに勤しんだかを描き出すことでなく、むしろ、一般民衆の間に狩りを押し広めることであった。しかも、スキルスの大地主が「まっとうな狩りの様式」と考えていたところを法文に明記するのは、あるいは、この大地主がプラトンの理論に従っている、のをアプリオリに要請するのは、あまりにも困難でとうてい出来そうもない。狩りを欲する人間なら——しかもそうする余裕のある人間なら——馬に乗って狩りに勤しんで当然である。かれに乗馬の仕方を教えたのは、狩りの技術でなく乗馬のそれであって、そのような技術をクセノポンは別の作品でしつかり論じているが、獵犬の訓練は、狩りを扱った作品に徹底してふさわしい。ゆえにかれは『キユネゲティクス』に、この技術をめぐる自己体験の帰結を、あまたの魅惑的な細目——われこそは獵犬に精通して深い愛を注ぐ人間にはかならない、のを明示するような——にまで及んで書き留めたのだった。

クセノポンはこうも主張した。わたしの作品は目下の教育論議に寄与するところ大なのだ、と。そして作品の導入部でこう口にしてはいる。狩りを発明したのはアポロンとアルテミスで、この双子の神は、ケンタウ

ロス族のキロンの公明正大きを讃えて、それを当人に教授した、と。古えの伝説ではキロンは、あまねく英雄たち—— わけてもアキレウス——の師匠として登場し、ピンダロスは、このアキレウスがキロンの弟子としてどのように狩りを学んだか、を滔々と物語っている。クセノポンは、ソフィスト的な雄弁家に特有のやり方でこの神話的手本にまで逆上り、カロカガティアにみられる双方——狩りと若者教育——の切り離しがたい結び付きをキロンに具体化して、そうした「結び付き」こそ、きわめて古く、本来的で、価値も高い「貴重品」なのだと思ひ込ませようとする。かれの口から数え上げられるのは、キロンのパイディアを介して育成された高名な英雄たちの長大なリストで、さらには、こうも付け加えられている。それらの英雄たちはすべからず、最高のアレテアの中で訓練されたが、それはもっぱら「狩りの実践とその他のパイディア」のお蔭というほかはない、と。そして、この点を証明するべく、それぞれの英雄について個々別々の物語をしかるべく披歴したが、これこそ、英雄たちの目録がリアルな神話学的・詩的な伝統から「一括して」引き継がれたのではなく、英雄譚をめぐるクセノポン自身の知識から「当人の手で」粒々と創り上げられたのを物語る何よりの証拠にちがいない。かれの胸には、英雄時代の始まり以来「狩り」は正銘のパイディアが拠つて立つ「基盤」の一つであり続けた、という自身の論題を強化したい：この切なる思いが伏在したからである。当人はしかし、明らかにこう感じていた。「狩り」はみずからを助けて、その人格を形造つてくれる、というわたし個人の訴えは、当時の思想の一般傾向に大きく反しているだろう、と。そのゆえに、かれの喜ばしい小作品は、本当の意味で「興味深い」ものとなっていたが、ここでは、作品の技術的細目に立ち入るには及ばない。この作品の魅力は、作品全体の背後に横たわる豊かな「狩猟体験」にあったからである。関心の中心は、むしろウサギ狩りで、そ

れが作品の大半を占め、これを別にすると、雄鹿や野生の熊を狩るというギリシアのスポーツ論にしばしの時が費やされている。すなわち、ライオン、ヒヨウ、黒ヒヨウ、クマ等々の「獲物」が積極的に狩られているのは、わたしの時代を見渡すと、マケドニア、小アジア、中央アジアを措いてなかった、と。

ここでは『ギユネゲティクス』の結論部を取り上げて、導入部にしっかりと結び付けなくてはならない。この結論部には、パイディアという主題とこの作品がどのように繋がるか、が今一度強調されていたからである。著者が論点に据えるのは「あまねく人間は単に言葉のみで教育できる」というソフィストの訴えで、対してクセノポンは、いつもと同じく倫理的な理想を奉じ、主たる関心は「人となり」の形成にあった。その際の土台をなすのは「身体的な健康」を措いてなく、狩りは、人を健康にし、目と耳を鋭敏にし、あまりに早く老いるのを防いでくれるだろう。加えて、戦闘訓練にも最適といつてよい。武器を携えての長い行軍、容赦のない天候、野外での就寝等々にしつかり耐える習慣を養つてくれたからである。狩りを介して低級な快樂は脇に押しやられ——「まっとうな教育」を介してと同じく——人間自身も公明正大で克己的となる。クセノポンは、これが何を意味するかを自身の口から語っていないが、当人の中で最も高く評価されていたのは、明らかに、まっとうな規律を身に付けようとする「抑えがたい想ひ」であった。そのための訓練は、紛うことなき事実を介して強化されたが、それが、ここにいう「まっとうな教育」にほかならない。そのような点は——現実主義的かつ實際的に——ソクラテスの理想へと向き直らせてくれた。作品の全体に「勢い」を与えているのは「ポノス（粒粒辛苦）」——これを欠いたらどのような教育も成り立たない——への賛美だったからである。哲学史家の面々は、当の本人がポノスにかくも着目したのはアンティテネスという

道徳家に感化されてのことだ、と考えた。この道徳家は、ソクラテスの教えをこのように解き明かしたからである。クセノポンはしかし、過酷な訓練を生来的に好んで、必要な折には自身の全力を余さずに絞り出せる人間であつて、ここでは、いずれにせよ、みずからの個人的体験に訴えて語っていた。ポノスは、狩りにおける教育要素といつてよい。古えの英雄たちはキロンの手で教育されたが、かれらの気高いアレテーを確立したのはポノスを描いてない。ソフィストの面々は、弟子の教育にあつて数々のテキストを用いたが、それらにはリアルな中身(ゲノーマイ)が欠け、若者が手にしたのは、役立たずの空想癡^イでしかなかつた。そのような種子から正銘のカロカガティアが生い育つなど、クセノポンにはどうてい信じがたく、門外漢のシロウトながら、個人的体験はこう教えて止まなかつた。およそ何事であれ、そもそも何が善なのかは、自然から学ぶほかはなく、自然に次いでは、本当に善くて有益な事柄をしつかりと弁えている人間から、そうするに如くはない、と。現代教育が試みるのは、技巧的な表現に訴えた^イ見せ披かし^イにすぎないが、クセノポンは、わたしには、この手のこと^イはまるで分らない、と請け負つて、こう口にするのである。アレテーを育てる正銘の^イ糧^イは、単なる言葉(オノマタ)でなく、中身(ゲノーマイ)と思案(ノエーマタ)を描いてない、と。これによつて意味されているのは、ソフィスト——この場合には「言辞を弄ぶ」輩のすべて——のみを排すること、あまねく真の教養愛(ピロソピア)まで洗いざらいそうすることではない。すぐれた狩人は、最高の教養を身に付けて社会共同体の生活にもしつかりと寄与し、他を顧みない身勝手と飽くを知らない貪欲は、獲物を追い求める狩人の精神にとつていそぐわれない。クセノポンは、狩り仲間の面々が健康にして敬虔であるのを切に願ひながら、こう確信するのだった。狩人の仕事こそ神々の嘉したまうところである、と。

訳者あとがき

ここに紹介した和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な、G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしてゐる。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であつた。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあつて、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切つて『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり^イするものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。

今回は、紙数の制約もあつて、PAIDEIA (Book Four: The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato (第四卷「プラトンの時代における教養理想のせめぎ合ひ」), Oxford University Press, 1971) から「7, Xenophon: The Ideal Squire and Soldier (第七章「クセノポン: 地主・兵士」の理想)」のみを掲載してみた。

(本学文学部非常勤講師)